よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—

34

よろこびの知らせ
第 34 集

目　　次

聖霊の剣 …… 1
エペソ 6:14-17

聖霊による祈り …… 10
エペソ 6:18-20

御顔の光 …… 19
詩篇 44:1-8

満ちあふれる恵み …… 28
ローマ 5:18-21

ここに収められたメッセージは、2022 年 6～7 月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

© 2022, Philip Nakao

聖霊の剣
エペソ 6:14-17

6:14 では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、
6:15 足には平和の福音の備えをはきなさい。
6:16 これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。
6:17 救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。

きょうの箇所に書かれているのは、古代ローマ兵士の姿です。パウロはこの手紙を書いたとき、裁判を待つ 2 年の間、軟禁状態にありました。ローマ兵士が四六時中彼を見張っていました。パウロはそうしたローマ兵士の姿にヒントを得て、この箇所を書いたと思われます。

一、兵士の身支度

最初に兵士の身支度を見ましょう。消防士は英語で“Firefighter” と言いますが、燃え盛る火と戦い、炎の中に取り残された人を救い出すのに、まさかアロハシャツにショーツ、ビーチサンダルという姿で出動できるわけがありません。身を守るためのさまざまなものを身に着けます。同じように、信仰の戦いに臨むキリスト者や人生の戦いの中にある人々には、ふさわしい身支度が必要です。それは 14、15 節に書かれれています。

まず第一に「腰には真理の帯」です。「腰」は「月（からだ）の要（かなめ）」と書くように、運動機能の中心部分です。そこに「真理」の帯を巻くというのは、

私たちの行動の基準が真理に基づき、真理に導かれるものであるようにということです。

「真理」はしばしば隠されることがあります。権力者たちがメディアを使って、自分たちに都合のよいことだけを広め、都合の悪い事柄を隠そうとします。同じようなことは、社会だけでなく、私たちの心の中でも起こります。「神がおられ、神を求める者に報いてくださる」（ヘブル 11:6）という真理が見えなくなってしまうことがあります。突然、思ってもみないことが起こったり、ものごとが思い通りに行かないことに、私たちは出会います。それがたった一つや二つのこと、一回や二回だけであっても、これから先、何もかもがうまくいかないと思い込んでしまうことがあります。そして、失望、落胆し、「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう」（詩篇 50:15）との神の言葉を忘れてしまうのです。「真理」が隠されたら、また、それが見えなくなったら、私たちは行動の基準を失い、人生の勝利を得ることができません。

次は「胸には正義の胸当て」です。「胸当て」は大切な心臓と肺臓を守ります。また心臓は “Heart” と言って「心」を表します。心に「正義」がなければ、とりわけ、神を恐れるその人の人生の戦いには、本当の勝利はありません。

第三は「足には平和の福音の備え」です。兵士にはさまざまな役割があります。皆が武器をとって戦うわけではありません。「伝令」も兵士の大切な務めで、通信手

段の乏しかった古代にはとくにそうでした。伝令は遠くの戦場で起こったことを本営に伝えました。紀元前 450 年、ギリシャのマラトンでアテネ軍がペルシャの遠征軍を退けました。このときフィディピディスという兵士が、マラトンからアテネまで 42.195 Km の道を駆け抜け、「我勝てり」と告げました。ここから「マラソン」という陸上競技が生まれました。アテネの伝令が伝えた「我勝てり」という勝利の宣言は「エウアンゲリオン」（良い知らせ）と言われますが、聖書のこの箇所では「福音」と訳されています。しかも、それは「平和の福音」です。伝令が伝えるメッセージには「勝利」と「敗北」と「和睦」の三つがありました。聖書が伝える福音は、神が、神に敵対していた私たちと和解してくださり、平和をもたらしてくださったという「和睦」・「和解」の知らせです。「足には平和の福音の備えをはきなさい」とは、いつでも、福音を語り、証しできるよう準備をしておきなさいということなのです。

二、兵士の防具

次に二つの防具を見ましょう。まずは、「信仰の大盾」です。ギリシャ語の「大盾」という言葉は「ドア」という言葉から出たものです。当時の大盾は幅 2 フィート半（30 インチ）、高さが 4 フィート（48 インチ）で、実際のドアより低いですが、その高さでも、身体をかがめれば十分に出入りできます。日本の茶室の「躙り口」（にじりぐち）よりは大きくできています。この大盾は木材を何枚もの薄い板にし、それを組み合わせ、表面を

動物の革で覆ったものでした。実際に使う時には、大盾を水に浸して革に水分を含ませます。重くはなりますが、それによって敵が打ち込んでくる火の矢を防いだのです。

当時の火矢は、鏃（やじり）にタールを付け、それを燃やしたものです。火矢によって相手を傷つけるだけでなく、火傷を負わせることができる強力なものでした。とりわけ、闇夜に飛び交う火の矢は相手に大きな恐怖心を与える効果もありました。この矢は兵士が身に着けている胸当てでは防ぎきれません。それで大盾によって全身をカバーしなければならなかったのです。

これが「信仰の大盾」と言われているのは、神がより頼む者の「盾」であり、私たちが神により頼むとき、敵の火矢から守られるからです。「主はわが巌、わがとりで、わが救い主、身を避けるわが岩、わが神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。」（詩篇 18:2）「神、その道は完全。主のみことばは純粋。主はすべて彼に身を避ける者の盾。」（詩篇 18:30）「まことに、神なる主は太陽です。盾です。主は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒まれません。」（詩篇 84:11）「主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたは、その翼の下に身を避ける。主の真実は、大盾であり、とりでである。」（詩篇 91:4）このような言葉は聖書に何度も繰り返されています。「信仰の大盾」を受け取るとは、神に信頼して、神のもとに身を寄せることなのです。

もう一つの防具は「救いのかぶと」です。大盾は身体をすっぽり覆ってくれますが、前を見るために少し首を伸ばすと、頭をやられてしまいます。「かぶと」は頭を守るのになくてならないものです。また、ローマ軍の「かぶと」のてっぺんには房がついていますが、その形によって兵士の所属や階級を表しました。「軍隊の「かぶと」は、王室の「王冠」に相当し、それをかぶる者の地位や身分を表したのです。

王は冠をかぶり、王族は勲章を身につけ、女性であればティアラという髪飾りをつけます。古代では、一般庶民は、王族のような衣服を身につけることを禁じられていましたが、例外がありました。それは婚礼です。婚礼の時だけは、花婿も花嫁も身を飾ることを許されたのです。それで、イザヤ 61:10 にこうあります。「わたしは主によって大いに楽しみ、わたしのたましいも、わたしの神によって喜ぶ。主がわたしに、救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせ、花婿のように栄冠をかぶらせ、花嫁のように宝玉で飾ってくださるからだ。」神は、ご自分の御子イエス・キリストを信じる者を救い、ご自分の子どもとしてくださいました。言うならば「王子」、「王女」にし、その頭に栄冠をかぶせてくださいました。信仰の戦い、人生の戦いに備えて神から受け取る「救いのかぶと」とは、神が信じる者にお与えくださった神の子どもとしての身分です。神は、その敵に、「これはわたしの子どもだ。おまえたちは手を触れてはならない。わたしが彼らを守る」と言って、神の子どもたちを守って

くださるのです。

三、御霊の剣

今まで５つの武具を見てきました。腰には「真理の帯」、胸には「正義の胸当て」、足には「平和の福音の備え」、全身には「信仰の大盾」、そして、頭には「救いのかぶと」でした。これらはみな、「守り」のための身支度であり、武具でした。最後の６つ目は攻撃用の武具で、それは「御霊の剣」、すなわち「神のことば」です。「神のことば」は “The Word” ですが、“WORD” に “S” をつけると “SWORD”（剣）になりますから、「御霊の剣」は「神のことば」、「神のことば」は「御霊の剣」と覚えるとよいでしょう。

ローマ兵士が身に着けていたのは「両刃の剣」でした。それはとても鋭いものでしたが、神のことばは、この「両刃の剣」よりも、さらに鋭いものです。ヘブル4:12 に「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます」とある通りです。神のことばは人の行動だけでなく、その動機、心の中に隠されたものまでも明らかにします。神のことばの前には、誰も自分を隠すことができません。そう言うと、恐ろしいもののように聞こえますが、実際は私たちを傷つけるものではなく、癒やすものなのです。外科医が使うナイフが身体の組織を傷つけないようにして、悪い部分を取り除くように、神のことばも、私たちの内面にあるものを切り分

け、良いものを残し、悪いものを取り除いてくれるのです。ですから、私たちは神のことばを愛し、慕います。神の言葉の前に自分をさらけ出します。

「御霊の…」と言われているのは、人間に神のことばを示されたのが聖霊だからです。ペテロ第二 1:21 に「なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです」とある通りです。この神のことばが後の時代までも保存され、すべての人に届くために文字とし、書物としてくださったのも聖霊です。そして、私たちが聖書を読み、学ぶとき、それを神のことばとして理解することができるのも聖霊によるのです。

「御霊の剣」、神のことばは、６つの武具のうち唯一の攻撃の武具です。イエスも神のことばによって誘惑を斥け悪魔に勝利されたことからも分かります。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい」との誘惑に、イエスは「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある」（マタイ 4:4）と言われ、聖書の引用によってそれを斥けました。

すると、誘惑する者も聖書を引用してこう言いました。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる』と書いてありますから。」（マタイ 4:6）誘惑する者も、聖書を使うのです。ですから、私たちは聖書を正し

く学んでいなくてはなりません。そうでないと間違った教えに引きずられ、間違った生活をし、勝利をなくしてしまうのです。イエスは、間違った聖書の引用に対して、「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある」（マタイ 4:7）と言ってそれを退けました。

「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう」という誘惑に対しても、イエスは「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある」とおっしゃって、サタンを斥けておられます。イエスは神の御子であり、イエスご自身の言葉も神のことばなのですから、ご自分の言葉で誘惑を退けることもできたでしょう。しかし、イエスがすべて聖書を引用して「…と書いてある」と言われたのは、私たちに誘惑を退ける方法を教えるため、つまり、御霊の剣である神のことばの使い方を教えるためであったと思います。

私たちは皆、「御霊の剣」である聖書を持ち、学んでいます。しかし、それをしっかり保ち、実行しているでしょうか。私たちのみことばの剣は、よく手入れが行き届いて、切れ味の鋭いものでしょうか。みことばの剣が、長い間使わないためさびついたり、刃が欠けたままになっているということはないでしょうか。昔、金に困った武士は、刀を売って、その代わりに竹でできた刀をさしました。それを「竹光」というのですが、みなさんの持っているみことばの剣が竹光では、信仰の戦い、

人生の戦いには役に立ちません。

また、どんなに立派な刀を持っていても、それを使いこなせなければ、芸術品としての値打ちはあっても、武具としては役に立ちません。神のことばは飾り物ではありません。実際に使ってこそ意味があります。そして、その使い方を、イエスから、また聖霊から学ばなければなりません。私たちみなが、「御霊の剣」、神のことばという武具をしっかりと受け取り、信仰の戦い、人生の戦いに勝利する者となることを、神は、期待してくださっています。

（祈り）

父なる神さま、信仰の戦い、人生の戦いにおいて、あなたが私たちを、さまざまな武具で守ってくださることを感謝します。勝利があなたにあることを信じて、私たちも、それらに身を固め、「御霊の剣」、神のことばによって、勝利を収めることができますよう、助け、導いてください。主イエス・キリストのお名前で祈ります。

聖霊による祈り
エペソ 6:18-20

6:18 すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。
6:19 また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように私のためにも祈ってください。
6:20 私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。

一、まず、祈る

エペソ 6:13-17 には、霊的な戦いのための武具が書かれていました。17 節には「救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい」とあります。神の言葉は、聖霊が私たちに与えてくださった「剣」です。聖書は、この「御霊の剣」によって信仰の戦いや人生の戦いを戦うことを教えています。では、「御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい」との言葉の後にはどんな言葉が続いているでしょうか。「その剣をふるって戦いなさい」などという言葉が続くだろうと、誰もが思います。ところが 18 節からは、「祈りなさい…祈ってください」と、祈りについて書かれています。しかし、ここで言われている祈りは、エペソ 6:13-17 にある霊の戦いの武具と無関係ではありません。武具に身を固めた兵士が第一にすべきことが祈りで

あると教えられているのです。武具を身につけたら、まず、ひざまずき、祈り、戦いに備えなさいと教えられています。

確かに、私たちが何かをしようとするときには、まず「祈り」から始めなければなりません。マルチン・ルターは、とても忙しい日々を送っていましたが、ある日、「今日は特別忙しいので、もっと時間をかけて祈ろう」と言って、ふだんよりも祈りの時間を増やしたと言われています。私たちだったら、「きょうは忙しいから祈りを短くしょう」と考えてしまいますが、ルターはそうではなかったのです。「忙しいから、もっと祈ろう」というのが、信仰者の生き方であることを教えられます。私は、よく祈らないで何かをしたり、判断したため、失敗してしまったことがありますが、皆さんはどうでしょう。何をするにも「まず祈る。」これは大切なことです。

二、祈りによって戦う

戦いの前に、戦いに備えて祈る。大事なことですが、きょうの箇所は、祈りは戦いに備えるためばかりでなく、それによって戦うものである、また、祈りそのものが霊の戦いの戦場（“battlefield”）なのだと言われています。

2015 年に “War Room” という映画が作られました。この映画の主人公エリサベツは、Oak Cliff Bible Fellowship という教会がダラスの南のほうにありますが、そこのトニー・エバンス牧師の娘、プリシラ・シャイラーさんが

主人公を演じています。不動産会社で働いているエリサベツは、クララさんから「家を売りたい」という連絡を受けて、彼女の家を訪ねました。エリサベツはクララさんに個人的な悩みを打ちあけたところ、クララさんは、自分の祈りの部屋を見せ、エリサベツに「祈りによってそれと戦いなさい」（“You need to do your fighting in prayer.”）とアドバイスしました。エリサベツはクララさんにならって、自分の家のクローゼットを祈りの部屋にし、祈りに打ち込みました。そうした祈りによってエリサベツ自身が変えられ、夫が変えられ、大きな問題が解決するというのが、この映画のおおまかなストーリーです。軍隊では作戦を立てる部屋を “war room” と言いますが、エリサベツの場合、彼女のクローゼットが霊的な戦いを導く部屋となりました。

この映画が人々の共感を呼んだのは、多くの人々が、この映画の主人公と同じように、祈りによって人生の戦いを乗り越え、勝利してきたからです。信仰の模範となり、人々に感化を与えてきた人々は皆、「祈りの人」でした。良い証しを立ててきた家庭はどこも、家族が共に祈り合う「祈りの家庭」でした。多くの人をキリストに導いた教会は、そのメンバーが熱心に祈る「祈りの教会」でした。D. L. ムーディが牧師をしていたシカゴの教会には、かつて、多くの見学者が訪れていました。そのツアーのガイドは「この教会の伝道の原動力になっている部屋があります。そこにご案内しましょう」と言って、人々を講壇の真下にある地下室に案内しました。そ

して、こう説明しました。「ここでは、牧師が説教している間、何十人という人が神の言葉が働き、人々が信仰を持つように祈っているのです。」人々を信仰から引き離そうとする力と戦っているのは、講壇に立つ説教者だけではないのです。説教者は「御霊の剣」である神のことばで戦いますが、その戦いを支えるのは、説教者のために祈る多くの人々の祈りなのです。

伝道、宣教は「霊の戦い」です。そしてこの戦いは、御霊の剣とともに祈りによって戦うのです。祈りは6つの武具に続く、7番目の武具だと言ってもよいほどです。

パウロは人々に「祈りなさい」と言うだけでなく、「私のために祈ってください」と願っています。「また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように私のためにも祈ってください。私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」（19、20節）パウロは2年間、軟禁状態にありました。だからと言って、伝道をあきらめませんでした。パウロは訪ねて来る人たちに福音を語り、聖書を教えました。パウロを監視していたローマ兵やその上官たち、皇帝の親衛隊にも福音を語りました（ピリピ1:12参照）。パウロは、まもなく解放される希望を持っていましたので、出獄したら伝道旅行に出かけるつもりでした。それで、「また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができ

るように私のためにも祈ってください」と、人々に祈りを要請したのです。

私が英語でいただく Email に “May I covet your prayer?” という言葉が書かれていることがよくあります。“covet” というのは「他人の物などをむやみに欲しがる」、「おねだりする」という意味の言葉で、決して良い意味ではありませんが、祈りに関しては、大いに使っていい言葉だと思います。他の人に「祈ってください」と願うことは、決して恥ずかしいことではありません。自分でよく祈る人ほど、他の人に「祈ってください」とお願いするものです。それは、よく祈る人ほど祈りの力を知っているからです。理論としてではなく体験して知っているからです。祈りの力を知ると、祈らないと損をした気持ちになります。実際、祈らない人は、祈りによって得られるものを捨ててしまっているのですから、大損をしているのです。他の人に祈ってもらい、また、自分も他の人のために祈る。そんな祈りによって、私たちは霊的な戦いに勝利し、お互いが霊的に豊かになっていくことができるのです。

三、聖霊によって祈る

祈りがどんなに大切なものか、誰もが知っています。私たちは 18 節にあるように「絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし」祈りたいと思います。しかし、それは「頑張って祈らなければならない」という義務的なものではありません。ここで言われている祈りの「忍耐」は、苦しいだけのものではな

く、ほんらい喜びであるはずです。「歌いつつ歩まん」（“Singing I go.”）という賛美がありますが、それは「祈りつつ歩まん」（“Praying I go.”）ということでもあると思います。祈りは私たちの日々の歩みの一部です。

しかし、日々に祈るという習慣が身につかない、気が散って祈りに集中できない、また、祈りが聞かれているという確信が持てない、何をどう祈ったらよいか分からないという悩みを抱えている人も多いと思います。祈る気力がななり、心を置き去りにしたまま、ただ口先で祈っていることに気付き、「これでは良くない」と反省することもあるでしょう。そんなときはどうすればよいのでしょうか。

聖書はこう答えています。「どんなときにも御霊によって祈りなさい。」「御霊によって祈る」、つまり、聖霊に促され、助けられ、導かれて祈ることです。聖霊は、私たちの心に祈りを生み出してくださるお方です。ローマ 8:15 にこうあります。「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父』と呼びます。」神は、天地の主です。この主なる神から見れば、地球は、大宇宙の中では豆粒にもならないような小さな星にすぎないでしょう。人間はそんな地球にしがみついている弱い生物にすぎません。しかし、神は、そんな人間をご自分のかたちに造り、神と語り合うことができる者にしてくださいました。あらゆる物が神の言葉に服従していますが、彼らは

神の言葉を理解していません。人間だけが神の言葉を聞いて悟り、それに答えて祈ることができます。「祈る」ことは人間だけに与えられた特権です。

しかも、イエス・キリストを信じる私たちは、聖霊によって神の子どもとしていただいています。神に語りかけるといっても、奴隷が恐る恐る自分の主人に物を言うのとは違います。小さな子どもが自分の父親に向かって遠慮なく話しかけるように、神を「父よ」と呼んで、どんなことでも祈ることができるのです。「アバ」というのは、ユダヤの子どもたちが父を呼ぶとき使う言葉です。聖書は「アバ」という言葉を使うことによって、イエスを信じ、聖霊によって生まれ変わった者はだれでも、素直に神を「父」と呼んで祈ることができることを教えています。聖霊は私たちの心を開き、唇を開いて、私たちに「父よ」と呼ばせてくださいます。神を「父よ」と呼ぶことができたら、そこから、おのずと祈りが引き出されてきます。聖霊が祈りを導いてくださるのです。

聖霊が私たちの祈りを助けてくださることについては、ローマ 8:26 にこう書かれています。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。」何をどう祈ったらよいか分からないとき、また、苦しくて祈りが言葉にならず、ただうめくばかりのとき、そんなときも、私た

ちの内におられる聖霊が、私たちの霊とともにうめいて、私たちに代わって祈ってくださるのです。

ローマ 8:34 には、「罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです」とあります。イエス・キリストが天で私たちの祈りをとりなしてくださることが書かれています。このイエス・キリストのとりなしに加えて、私たちは聖霊のとりなしを持っているのです。私たちの祈りは、地上では聖霊のとりなしによって、天ではイエス・キリストのとりなしによって、神に届けられます。この二重のとりなしによって神に届かない祈りはないのです。「祈りは聞かれる。」この確信は、私たちの祈りが立派だから、一日も休ます懸命に祈ったからという、私たちの側の功績によるのではありません。神があわれみのゆえに聞いてくださるから、イエスがとりなしてくださるから、聖霊が助けてくださるからなのです。

「聖霊によって祈る」というのは、「聖霊に祈る」ことでもあります。私たちは、御父にも、御子イエスにも、聖霊にも、「父よ」、「イエスよ」、「聖霊よ」と言って祈ることができます。しかし、多くの場合、祈りは父なる神に向けられます。けれども、父なる神に祈るときにも、私たちの霊は聖霊に祈っているのです。聖霊は私たちの霊のうちにおられるので、聖霊への祈りはかならずしも声に出る祈りにならないでしょうが、私たちが唇

でイエスの御名によって父に祈るときには、私たちの霊は聖霊に祈り、聖霊も私たちの霊に働きかけてくださるのです。こうした「聖霊による祈り」が、信仰の戦い、人生の戦いで、私たちに勝利を与えるのです。

（祈り）

父なる神さま、あなたは聖霊によって私たちに語りかけ、また聖霊によって、私たちがあなたに語りかけることができるようにしてくださいました。聖霊によって私たちの祈りを強め、多くの人々のためにとりなし祈る者としてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

御顔の光
詩篇 44:1-8

44:1 【指揮者のために。コラの子たちのマスキール】神よ。私たちはこの耳で、先祖たちが語ってくれたことを聞きました。あなたが昔、彼らの時代になさったみわざを。
44:2 あなたは御手をもって、国々を追い払い、そこに彼らを植え、国民にわざわいを与え、そこに彼らを送り込まれました。
44:3 彼らは、自分の剣によって地を得たのでもなく、自分の腕が彼らを救ったのでもありません。ただあなたの右の手、あなたの腕、あなたの御顔の光が、そうしたのです。あなたが彼らを愛されたからです。
44:4 神よ。あなたこそ私の王です。ヤコブの勝利を命じてください。
44:5 あなたによって私たちは、敵を押し返し、御名によって私たちに立ち向かう者どもを踏みつけましょう。
44:6 私は私の弓にたよりません。私の剣も私を救いません。
44:7 しかしあなたは、敵から私たちを救い、私たちを憎む者らをはずかしめなさいました。
44:8 私たちはいつも神によって誇りました。また、あなたの御名をとこしえにほめたたえます。セラ

明日は “4th of July” です。昨年は 7 月 4 日がちょうど日曜日でしたので、特別な礼拝を持ちましたが、今年は通常の礼拝でしたが、アメリカのための特別な祈りを組み込みました。きょうの御言葉も、アメリカの歴史と重ね合わせて考えてみたいと思います。

一、独立への道のり

1492 年にアメリカ大陸が発見されると、ヨーロッパの各国は競ってそこに植民地を作りました。1498 年に英国

がニューイングランド植民地を、1534 年にはフランスがカナダ植民地を作りました。フランスはのちにルイジアナにも植民地を作りました。1620 年、英国から「ピューリタン」と呼ばれた人々が、信仰の自由を求めて、アメリカにやってきました。彼らは「ピルグリム・ファーザーズ」と呼ばれ、その人たちによって英国植民地は大きく発展しました。しかし、植民地の人口は少なく、労働力は常に不足していました。植民地の人々には本国の人たちと同じ権利が与えられず、貧しく、不利な立場に置かされていました。

そのころ、英国とフランスはヨーロッパで互いに勢力争いをしており、アメリカの英国植民地とカナダのフランス植民地の間でも、代理戦争のようにして対立が起こりました。ヨーロッパでは英国が戦争に勝ったので、アメリカでも英国の 13 州が東海岸を治めるようになりました。

しかし、英国王ジョージ 3 世は、英国が費やした戦費を 13 州の植民地に支払わせようとし、植民地に不利な課税や法律を押し付けてきました。13 の植民地は「大陸会議」を結成し、団結して事態の解決を本国に要請しましたが、本国は、13 州に圧力をかけ、軍隊を送り込んできました。そのため独立の機運が高まり、独立宣言が作られることになりました。トーマス・ジェファーソンが書いた原案が修正を経て可決されたのが 1776 年 7 月 4 日でした。それ以来、この日が独立記念日となりました。私たちは、2024 年に選ばれる次期大統領とともに 2026 年に

250 回目の独立記念日を祝うことになります。

けれども、アメリカが実際に独立したのは、それから 8 年後でした。その後 8 年間にわたる独立戦争が続き、1783 年、英国がアメリカの独立を認め、やっとアメリカが独立国家として諸外国から認められるようになったのですが、まだ憲法もなく、大統領もいませんでした。憲法が制定されたのが 1787 年、ジョージ・ワシントンが初代大統領になったのは 1789 年のことで、そのとき、やっと、アメリカは国家の形を持ったのです。

二、信仰による一歩

独立宣言が起草され、採択されたのは、英国海軍が圧倒的な力で東海岸に押し寄せてきているときでした。13 州にはそれを迎え撃つのに十分な軍隊も装備もありませんでした。建国の父たちが立ち上がったのは、何らかの勝算があったからではありません。彼らは、見える現状によってではなく、見えない神の導きを信じて、立ち上がりました。

ヘブル 11:1 に「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです」とがあります。「信仰」を定義している箇所です。もうすこし分かりやすく言えば、「思い描いたものが実現し、心の中にあって見えなかったものが見えるようになって、それが証明されること」と言うことができます。

この信仰の定義には、現代の科学に通じるものがあります。科学では、まず「仮説」を立てます。仮説を立てた段階では、まだ証拠はありません。けれども、実験や

観測を重ね、計算を繰り返すことによって、仮説が正しければ、それが現実のものとなり、目に見える証拠が示されるようになるのです。

たとえば、物質の根源は「原子」であり、原子核と電子から成り立つというのですが、それを見た人は誰もありません。誰も見ることはできません。原子核は陽子と中性子からできていますが、大阪大学の湯川秀樹教授は、陽子と中性子の他に「中間子」を理論的に予測し、ノーベル賞を受けました。今日では「中間子」は複合素粒子であり、100種類もあることが知られるようになりました。素粒子加速器が作られ、高速に加速された素粒子が衝突してできる痕跡を見ることができるようになりました。理論で確信されたものが、見える形で証明されるようになったのです。

信仰も同じです。科学者たちが理論を現実化し、目に見えないものを目に見える証拠によって証明していくように、私たちは信じることによって、神の約束を実現していきます。そして、神の約束が実現して見える形になることによって、それを証ししていくのです。

建国の父たちは、そうした信仰を持っていました。その信仰によって、まだ現実のものとなっていない「独立」を、すでに得たと信じて、一歩を踏み出したのです。それが実現するまでには十年以上必要でしたが、彼らは、独立の実現を前もって確信し、その信仰によって独立が実現したのです。

その信仰は、聖書に基づく、まことの神への信仰でし

た。独立宣言には「われわれは以下の真理を自明であると信じる。すなわち、すべての人は平等に創造され、ひとりびとりは創造主なる神によって、常に変らぬ、他に譲り渡すことのできない、生命、自由、幸福追求の権利が含まれている」とあります。これに似た言葉は日本の憲法第 13 条にもあって、こう書かれています。「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。」

しかし、独立宣言にある大切な言葉が日本の憲法にはありません。それは「創造主」です。日本の憲法にも「生命、自由、幸福追求の権利」が尊重されなければならないことがうたわれていますが、なぜ、それが尊重されなければならないのかという根拠が書かれていないのです。しかし、独立宣言には、「生命、自由、幸福追求の権利」は「創造主」である神から与えられた権利であるから、誰もそれを侵すことができないと書かれています。この「創造主」（“Creator”）は大文字で始まっており、明らかに、聖書が教える天と地の造り主、まことの神を指しています。独立宣言や憲法を起草し、採択した建国の父たちはみな、聖書が教える神を信じる人たちでした。彼らはこの神への信仰によって、独立への道を歩んだのです。

三、神への信頼

詩篇 44:1～8 には、イスラエルが約束の地に根付き、国

家を作り上げたことが書かれていますが、それはアメリカがヨーロッパから来た人々によって始まったのと似ています。ここには、イスラエルがカナンの地に定着したのは、神の恵みとあわれみによってであったことが歌われています。

イスラエルはエジプトで奴隷でした。神の力ある御腕によって、奴隷から解放され、約束の地にやってきました。彼らはモーセによって主の軍勢として組織されてはいましたが、軍事的には何の装備もなく、十分な訓練もありませんでした。イスラエルは荒野を放浪してきた難民のような状態でした。そんな人たちがカナンの地に入ろうものなら、たちまち先住民に滅ぼされてしまっても不思議ではありませんでした。ところが神は、イスラエルに勝利をお与えになりました。それは、まったく神のわざでした。2-3 節に「あなたは御手をもって、国々を追い払い、そこに彼らを植え、国民にわざわいを与え、そこに彼らを送り込まれました。彼らは、自分の剣によって地を得たのでもなく、自分の腕が彼らを救ったのでもありません。ただあなたの右の手、あなたの腕、あなたの御顔の光が、そうしたのです。あなたが彼らを愛されたからです」とある通りです。「あなたの右の手」、「あなたの腕」は神の力を、「あなたの御顔の光」は、神のあわれみやいつくしみ、つまり神の愛を表しています。

イスラエルは、この神に信頼して勝利しました。4-6 節に、こうあります。「神よ。あなたこそ私の王です。ヤ

コブの勝利を命じてください。あなたによって私たちは、敵を押し返し、御名によって私たちに立ち向かう者どもを踏みつけましょう。私は私の弓にたよりません。私の剣も私を救いません。」「私の弓」や「私の剣」は人間の力を表します。神の力を体験し、神の愛を知るなら、人は、自分の力にではなく、神の力に頼るようになります。そして、神に信頼する者はこう言うのです。「しかしあなたは、敵から私たちを救い、私たちを憎む者らをはずかしめなさいました。私たちはいつも神によって誇りました。また、あなたの御名をとこしえにほめたたえます。」（7-8 節）

8 節の最後にある「セラ」は、詩の区切りを表す言葉で、「沈黙」という意味があります。ここで、いったん歌が中断され、楽器だけが演奏されます。その間、静かに今歌われた言葉を思い返すのです。イスラエルの人々は、自分たちの歴史を振り返り、自分たちの国が、今、ここにあるのは神の力と愛によってであることを、どんなに感謝したことかと思います。

私たちも、アメリカ建国の歴史をふりかえるとき、アメリカが創造者である神の「右の手」、「力ある御腕」に支えられてきたことを知るでしょう。神の「御顔」の光が私たちを生かしていることが理解され、神の「御名」こそ、私たちが頼り、誇ることができるものであることが分かるのです。

神の「御顔」も、神の「御名」も、神の「人格」を表します。私たちに「御顔」を向けてくださるのですか

ら、私たちも神に顔を向け、「御顔」を求めたいと思います。私たちの全人格をもって、人格をもった神にこたえるのです。詩篇 27:8 にこうあります。「あなたに代わって、私の心は申します。『わたしの顔を、慕い求めよ』と。主よ。あなたの御顔を私は慕い求めます。」神は、つねに、「わたしの顔を、慕い求めよ」と言われ、私たちに御顔を向けてくださっています。神の御顔から目をそらすことなく、私たちも「主よ。あなたの御顔を私は慕い求めます」とお答えしたいと思います。

独立宣言を採択した人たちは、神の御腕に頼り、神の御顔を求め、信仰によって独立を勝ち取られました。まだ、見ていない勝利を確信して一歩を踏み出すことによって、その実現を見ました。私たちも自分たちの前にある問題の解決や、困難への解決を、そうした信仰によって乗り越えていきましょう。御顔の光を求めて前進してきたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、ごくわずかな人々から始まった貧しく小さなアメリカは、またたくまに世界で最も豊かで強い国となりました。それは、ただあなたの恵み、あわれみによります。先人たちがアメリカの将来のために築いてくれた信仰や道徳、政治や社会の基盤をくつがえそうとする力がいよいよ大きくなっていますが、そうした力に屈することなく、絶えずあなたの御顔の光を求めて、祈り続けることができるよう導いてください。主イエスのお名前で祈ります。

満ちあふれる恵み
ローマ 5:18-21

5:18 こういうわけで、ちょうど一つの違反によってすべての人が
罪に定められたのと同様に、一つの義の行為によってすべての人
が義と認められて、いのちを与えられるのです。
5:19 すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が
罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人
とされるのです。
5:20 律法がはいって来たのは、違反が増し加わるためです。しか
し、罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。
5:21 それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの
主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のい
のちを得させるためなのです。

礼拝は「祝福」の言葉で締めくくられます。いくつかの聖書の言葉が使われますが、いちばんよく使われるのが「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように」（コリント第二 13:13）でしょう。三位一体の神の祝福が、「キリストの恵み」、「神の愛」、「聖霊の交わり」の順で語られています。三位一体の神は、普通、「父」、「子」、「聖霊」の順で語られるのに、なぜ「祝福」の宣言では「キリストの恵み」が先になっているのでしょうか。

それは、「キリストの恵み」があってはじめて、私たちは「神の愛」を受け、「聖霊の交わり」に入ることができるからです。今週から三回に分けて、「キリストの恵み」、「神の愛」、「聖霊の交わり」の三つを学びま

す。「キリストの恵み」から始めましょう。

一、旧約時代の恵み

「恵み」とは、「それを受ける資格のない人に与えられる愛」と定義することができます。神は、正しい人、善良な人、誠実な人、また、何よりも敬虔な人を愛されます。では、何かのことで失敗したら、一度でも過ちを犯したら、不信仰な思いが起こって神を疑ったら、人はたちまち神から見捨てられるのでしょうか。いいえ、神の愛は大きく、その愛を受けるのにふさわしくない者をも愛し、慈しんでくださるお方です。

神はイスラエルをエジプトの奴隷から救い、彼らをご自分の民となさいましたが、それは、彼らが神の民と呼ばれるのにふさわしかったからではありません。聖書にこう書かれています。「あなたの神、主は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。」（申命記 7:6-8）神は、あえて、小さく、弱い民を選んで愛されました。イスラエルはエジプトから救われた後、何度も神に逆らいましたが、それでも神は彼らを愛し通されまし

た。それにふさわしくない者をあえて愛してくださる愛、それが「恵み」です。

エジプトから救い出されたイスラエルはカナンの地に国を作り、王を立てました。その中で最も愛された王はダビデです。ダビデには優れた素質がありましたが、神が彼を将来の王として選ばれた時は、父親エッサイの八人の男の子の末っ子で、父親の羊を飼う者でしかなかったのです。けれども神はダビデだけでなく、その子孫をも代々イスラエルの王とすると約束してくださいました。その言葉を聞いたダビデはこう祈りました。「神、主よ。私がいったい何者であり、私の家が何であるからというので、あなたはここまで私を導いてくださったのですか。神、主よ。この私はあなたの御目には取るに足りない者でしたのに、あなたは、このしもべの家にも、はるか先のことまで告げてくださいました。」（サムエル記第二 7:18-19）ダビデは、自分を「取るに足りない者」と言い、そんな自分を顧みてくださった神の恵みに感謝しています。このようにイスラエルも、ダビデも、自分たちが救われ、選ばれたのは神の神の恵みであることを知っていました。

このように神の恵みを受けたダビデですが、神の前に大きな罪を犯しました。ダビデはのちにその罪の結果を引き受けることとなり、息子のひとりがクーデタを起こし、一時的ですが、王位を追われました。しかし、神の恵みは変わることなく、ダビデの王位は回復し、約束どおり、それはソロモンに引き継がれました。ダビデはそ

のことによって、いっそう神の恵みをほめたたえる者となりました。詩篇 103:8-13 にこうあります。「主は、あわれみ深く、情け深い。怒るのにおそく、恵み豊かである。主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。」

私たちも、救われて神をほめたたえる者となりましたが、それば私たちに何かの功績があったからでしょうか。信仰深かったからでしょうか。真面目に信仰生活をしてきたからでしょうか。そうではありません。ただ、神の恵みのゆえです。私たちもダビデと同じように、神の恵みを感謝し、神をほめたたえたいと思います。

二、新約時代の恵み

ダビデ王朝は 400 年近く続きましたが、ついに、バビロンに滅ぼされてしまい、イスラエルは王を失い、国を失いました。それは神の民の罪のためですが、それでも神は、罪を犯した神の民を見捨てませんでした。ダビデへの約束を忘れず、時が来れば、その罪を赦し、王を与え、神の民を回復すると約束されました。その王がイエス・キリストです。イエス・キリストは、十字架によって罪の赦しを勝ち取り、ご自分を信じるすべての者を神

の民としてくださるのです。

旧約時代には、神の恵みはイスラエルに集中し、多くの預言者たちの言葉によって示されてきましたが、新約時代には、私たちの主であり、王であるお方、イエス・キリストによって示され、すべて信じる者に与えられました。聖書にこうあります。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。……私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」（ヨハネ 1:14-18）この言葉は、神の恵みが人となって地上に来られた、それがイエス・キリストである、イエス・キリストは神の恵みそのものであると言っています。

きょうの箇所、ローマ 5:18-21 は、アダム以来、イエス・キリストが来られるまで、罪と死が人類を支配していたが、イエス・キリストが来られ、罪の赦しを勝ち取ってくださってからは、信じる者は恵みの支配に置かれ、永遠のいのちに生かされる者となったと教えています。アダムによって罪とされた人類が、キリストによって義とされる。律法に従えば、死を宣言されるしかない者が、キリストによって永遠のいのちを受ける。これが

「恵み」です。新約の時代は恵みが支配する時代です。「主イエス・キリスの恵み」、これは、たった 10 文字の短い言葉にすぎませんが、ここには、私たちが思う以上の大きな祝福、幸いのすべてが含まれているのです。

三、私たちに与えられる恵み

ローマ人への手紙は、使徒パウロが、福音とは何かを系統立てて書いたもので、福音を論理的に説いていますが、決してそれを理論として扱っていません。「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」（ローマ 1:16）とある通り、福音は理論ではなく、私たちを救う力です。福音を聞いて信じる者は、罪の支配から解放され、恵みの支配に移されるのです。パウロが福音を「神の力」と読んだのは、彼自身の体験にもとづいています。

パウロはイエスとほぼ同じころ、ローマ帝国キリキア州の首都タルソで生まれました。この町はアテネやアレキサンドリアに勝るとも劣らない学問の町で、パウロもこの町でギリシャの哲学やローマの文学などを学んだだろうと思われます。しかし、ユダヤ人の両親から、しかも由緒あるベニヤミン族の血筋に生まれたパウロは、そうした道に進むよりはユダヤの伝統の道を選び、エルサレムに行って、当時最も著名だった律法学者ガマリエルの門下生となり、一にも律法、二にも律法と、律法を学び、守る生活をしました。そして、たちまちパリサイ派の若き指導者となりました。そんなとき、エルサレムに

ナザレ人イエスに従う一派、教会が生まれました。それはパウロから見れば、律法に逆らう集団で、決して許せないものでした。それで彼は教会の迫害に乗り出したのです。

聖書にはステパノを死に追いやった人たちが「自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた」とあります（使徒 7:57-58）。これは、パウロがステパノの殉教の責任を自らに引き受けたことを意味します。パウロは、それほどにキリスト者を憎んでいたのです。

パウロはエルサレムのキリスト者を苦しめるだけでは飽き足らず、エルサレムから北に 200 マイルもあるダマスコにまで行って、そこにいるキリスト者をも捕まえようとしました。ところが、その途上で、イエスがパウロにご自身を現されました。パウロはイエスの栄光の光に撃たれ、目が見えなくなりました。ダマスコに着いても、三日の間、何も飲まず、食べずに過ごしました。パウロは光に撃たれ死んでしまっても不思議ではありませんでした。ところがイエスは、ダマスコ教会の指導者アナニヤをパウロのもとに遣わしました。アナニヤはパウロを訪ね、イエス・キリストを信じる信仰に導き、彼にバプテスマを授けました。その時、パウロは再び見えるようになり、食事をして元気をとり戻しました。それからのパウロが命がけでキリストに従い、どんなに多くの人々に福音を伝えたかは、聖書に書かれている通りです。パウロはバプテスマを受けたとき、闇から光へ、死からいのちへ、律法の世界から恵みの世界に移されました。パ

ウロの生涯に、キリストの恵みの支配が始まったのです。

パウロは「私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした」（テモテ第一 1:13）と言って、正直に自分の罪を認めています。しかし、同時に、受けたキリストの恵みに感謝しています。パウロは「私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました」と言っています（同 1:14）。キリストの恵みはパウロを罪人（“Sinner”）から聖徒（“Saint”）へと変えました。パウロは自分を「罪人のかしら」だと言いましたが、キリストの恵みはそれを超える恵みだったのです。

「罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。」この言葉は、パウロの実際の体験からの言葉です。私たちも、パウロと同じように、信じてバプテスマを受けたとき、罪の支配から恵みの支配へと移されました。しかし、バプテスマを受けてからはもうどんな罪も犯さなくなるというのではありません。むしろ、信仰を持ち、神の聖さ、正しさが分かれば分かるほど、自分の罪が見えて来るでしょう。「律法がはいって来たのは、違反が増し加わるためです」とあるように、神の言葉は私たちのほんとうの姿を写し出します。しかし、同時に、神の言葉は罪の赦しと解放を告げ知らせてくれます。「しかし、罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。」イエス・キリストの恵みが、愛の神への道を開きました。聖霊との交わりに私たちを導いてく

れます。罪を赦され、罪からきよめられ、罪によって受けた傷が癒やされていくのです。そして、私たちは「満ちあふれる恵み」を体験するのです。礼拝で祝福の宣言を聞くたびに「主イエス・キリストの恵み」を心に受け入れ、キリストの恵みに信頼して日々の生活を送りたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、使徒パウロは「神の恵みによって、私は今の私になりました」と言いました。私たちも同じように申し上げます。キリストの恵みがなければ、私たちも、ここにいることばできませんでした。どうぞ、私たちを、さらに、キリストの恵みに頼る者としてください。キリストの恵みに感謝し、そのお名前で祈ります。

Penguin Club
www.penguinclub.net